

技術という媒体

直江清隆

電子書籍が普及するかどうかは巷で話題である。また数年前、ハイパーテキストと従来の活字媒体のテキストとの異質性について議論がなされたことも記憶に新しい。最新のものであるかどうかを問わず、あるいはテキストであるか画像・映像であるかを問わず、いわゆる情報メディアの多様なあり方が技術によって創り出され、たえず変容させられてきたことは、あらためて論じるまでもない。その歴史はおそらく、文字の発明や絵画の発明にまで遡ることができよう。だが、こうした主にコンテンツとしての情報メディアがわれわれと世界との媒介であるというだけではない。その可能性の制約とでもいうべき「技術」が一般にそれ自体である種の媒体（メディア）であるというのが、本論でまず確認したい点である。以下、以下技術という媒体について問う際のアウトラインをごく要約的に示していくことにしよう。

技術という媒体

まず、技術という広範で多義的な語に限定を附しておこう。この語の意味はテクニックや技、芸術からエンジニアリングにまで及ぶ。その限定、定義からして問題風味なのだが、差しあたりここでは、道具や機械といった技術的な人工物（及びその創造・制作や使用に関わる技能や知性）のことを念頭に置くことにしたい。

さて、技術については発明、普及、利便性の向上という仕方で理解しがちである。しかし、苟も媒体という以上、それはこうした一方向的なものではあり得ず、とりわけ我々にとっての世界や世界把握にも関わってこざるをえまい。いま、モデルとなるのは次のような議論であろう。

(1) 環境世界と主体的世界、自然と自由とを媒介する媒体という考え方がある。例えば、三木清の「主体と環境、主観的なものと客観的なものとを媒介するということが技術の本質に属している」、「技術の媒介的本質は道具において顕わになる。道具は手段Mittelであり、手段は媒介vermittelnするものである」といった主張がそれである。

(2) 人間-人工物-世界の関係について、人工物と身体との関係を基軸に考えるもの。例えばD・アイディは、①身体的関係。杖を使い、めがねで見るときのように、人工物が身体に内在化されるような関係。この場合、人工物「を」触ったり見たりするのではなく、人工物を「通して」それらを行うのであり、一定の技巧を習得することで人工物は半透明化する。②解釈学的関係。温度計や計器を読むということが例になるように、人工物が関係から一歩身を引くことなく、人工物「によって」世界の表象を解釈するような関係、等

*1 三木清「技術の哲学」『三木清全集』第7巻、岩波書店、1967年、202ページ。

を^{*1}挙げる。

(3) 技術を、社会システムにおいてコミュニケーション行為に代わって諸個人の行為の合理的調整を行う制御媒体とみなすもの。例えばフィーンバーグは、ハーバーマスの議論を拡張し、技術を貨幣や権力とならぶ制御媒体に数えている^{*2}。ただし、法律がすでにそうであるように、技術は他の領域やとりわけ生活世界と徹底して絡み合っており、更にまたシステムのうちに規範性が組み込まれているなどとする^{*3}ことで、技術の本質主義の立場を慎重に回避していることは注意を要する。

それぞれの議論にきちんと応対することはしないが、これらのモデルの概観からおよその見取り図が掴めてこよう。まず、(2) が関わるのは主に技術の使用の場面である。それゆえここではユーザーにおける人工物に媒介された世界把握や、道具の中に「棲み入る」(M. Polanyi)ともいうべき技術的人工物との癒合とそれからの距離化が考えられる。しかし、すでに三木が看破していたとおり、道具が習慣化し、身体の一部となるためには、すでに道具が発明されて与えられているのでなければならない^{*3}。かくしてここに(1)の媒介が勘案されねばならないことになる。

次に(1)においては、発明において創出される形が問題となる。形は技術におけるイデー的なものをなすわけであるが、この際、作り出された形としてばかりではなく、遡って形作る働きに目を向けることができる。そしてその際、形は発明家の頭にある、あるいは理念としてあるもののたんなる実現と見なされるのではなく、技術の過程のうちに見いだされなければならぬ。さもなければ、三枝博音も指摘するように、技術は人間と自然との間の単純な「橋」のイメージで捉えられてしまうことになる^{*4}。したがって発明としての技術には自然的なものとの距離と媒介の過程との双方の契機がなければならず、主体もこの過程のうちで形成されるものとして考察されることになる。「我々はものを創ること^{*5}によって自己を創ってゆく、我々の行為は環境形成的であるととも自己形成的である」。

そして、(1) から進んで二つの課題が設定されうる。第一は、技術的人工物が創造・制作する主体に隷属するのではなく、却って一定の自立性をもつということである。この自立的・客観的契機の側から考察するとき、(3) にいう社会システムにおける制御媒体というモデルが問題となり得る。第二は、上記の議論の背後にある問題として、自然的なものとの関係である。発明における対立、距離化は自然の異質性を浮かびあがらせるかに見える。しかし、ここにいう自然が直ちに自然法則的自然なのか、また自然との媒介のうちで道具としてあるとはいかなることなのかという問いが突きつけられることになる。いずれにせよ、技術という媒介は重層的・複合的なあり方をしている。それゆえ、技術的媒介について論じるためには、世界との関係のうち使用者-人工物-創造者の関係を織り込んだようなかたちで人工物のあり方についてより微細な議論からはじめる必要がある

*1 Don Ihde, *Technology and the Lifeworld*, Bloomington: IndianaUP, 1990, p. 140ff.

*2 A.f フィーンバーグ『技術への問い』直江清隆訳、岩波書店、2004年、245ページ以下。

*3 三木『構想力の論理』『三木清全集』第8巻、岩波書店、1967年、224ページ。

*4 三枝博音『技術思想の探求』こぶし書房、1995年、26ページ。

*5 三木「技術の哲学」211ページ。

うである。

2. 人工物の機能

まず、人工物の機能について概観しておこう。人工物が媒介の中で考えられるとして、先の自然との関係に加え、人工物がもつ機能そのものはこの媒介関係とは別個にあり得るのではないのかという問いがある。後者の「機能そのもの」と「含意」との区別に関するアプローチとして有力なものに、これらの機能を意味的なものと捉え、技術の明示的(denotative)意味と暗示的(connotative)意味とを区別するボードリヤールの記号論的試みがある。例えば、われわれは人工物(例えば椅子)が一定の機能(座る)をもつということを考えてみよう。椅子は「座るという可能性」を、自動車は輸送や移動を第一次的な機能として明示し、同時に「伝統」や「社会的地位」などを二次的機能として暗示する。前者は人工物が本来もつ機能のことであり、「何のために」「いかに」用いるかを指示するが、後者は人工物にとっては外的で、社会的連関の中で人工物が二次的に果たす機能である。この区別に上乗せする形で、ミュラーは物理的機能・構造(物理的/肉体的に「座る」こと)を付け加える。こうして、技術的人工物について(a)物理的機能・構造と(b)記号的機能・意味とが区別され、後者について(b1)明示的機能と(b2)暗示的機能が区別されることになる。

まず、物理的機能と記号的機能については、記号的機能は物理的構造に基づいて始めて可能になるのであり、例えば特定の物理的・化学的性質によってはじめて、特定の作用・反応が可能になり、特定の機能を実現しようという考え方がある。しかし、物理的機能・構造に技術的・記号的機能は還元されないとする有力な議論がある。すなわち、人工物(例えば椅子)が一定の機能(座る)をもつという言い方にすでに人工物特有の「二面性(dual nature)」が表されている。人工物はこの機能ゆえに技術的対象と呼ばれ、なんらかの行為との不可分の関係に立つのであるが、この機能を離れてみれば一個の物理的対象(例えば木)にすぎないというのである。ねじ回しについて論じたクロエの論文を援用して若干内容に立ち入っておけば、何ものがねじ回しであることの十分条件は、一定の物理的特徴を備えていることであり、こうした特徴がそのものをねじ回しとして機能させるのだという議論、言い換えれば何ものが設計者や使用者によってねじ回しと見なされ、使われることがねじ回しであることの十分条件であるという議論に対して、クロエは、それではたまたまねじ回しとして使われるコインもねじ回しであることになるのではないかと反論する。もしそうではないとすれば、「たまたま」ねじ回しであるのと「もともと」そうなのとの相違がどこかに見いだされなければならないはずである。それは物理的特徴ではなく、そもそもねじ回しとして設計されているかどうか、つまり設計者や設計者たちの集団がも

*1 J・ボードリヤール『物の体系』宇波彰訳、法政大学出版局、1980年。

*2 W. Muller, Order and Meaning in Design, 2001.ただし、ここでの記述は簡略化してある。

*3 Peter Kroes, Screwdriver Philosophy; Searle's Analysis of Technical Function, *Techné* 6:3, 2003.

つ志向性(intentionality)に基づくものなのだと彼は結論づける。よいねじ回しとでの悪いねじ回しというように、「機能」がある種の規範性をもつということは、ねじ回しであることにとってこのように基づけられた志向性が重要で、かつ必要であるということを表しているというのである。

もちろん機能の物質性に関する議論はこれで片付いたわけではない。物理的機能への還元可能性云々とともに、物理的性質の寄与についてより立ち入った議論が必要であることはいうまでもない。ともあれこの議論をとりあえず下敷きにして、第二の区別である（b 1）明示的機能（「座る」ことへの指示）と（b 2）暗示的機能（「伝統的」「トレンドィ」などの含意）について言及しておくことにしよう。この区別は、人工物の機能に関する問いを、意味的なレベルでの区別に議論を首尾よく転換させるものに見える。人工物がもつ機能そのものがこの媒介関係とは別個にあり得るのではないのかとする見地からするならば、前者に後者が付随するというように考えられよう。しかしこの区別ははまだ機能主義的で、維持することが難しい。

第一に、暗示的意味はライフスタイルを指示するだけでなく、一次的機能が遂行されるのがいかなる状況で、どのような仕方によって、どんな考え方によってであるかについても指示している。例えば、丸テーブルと角テーブルは食事をともにする際の異なるスタイルと結びついていて、角テーブルは座の上下があり、ヒエラルヒーと結びつきがちだが、丸テーブルでは全員が同じ身分で平等に卓を囲むという違いがある。ボードリヤールの議論は、テーブルがそうした人々の関係をいかに指示しているかについては語るが、テーブルが人々の関係をいかに命じ、いかに形成するかには注意を振り向けていない。丸テーブルが「平等主義的」な人間関係を形成するとき、食べるという実践においてテーブルがはたす一次的機能の遂行の仕方に関心がもたれるのであって、それに付随する二次的機能に関心が向けられるのではない。「事物が何を〈する〉かは、たんに〈指示〉や〈機能〉すること以上のことを含んでいる」^{*1}のである。

第二に、人工物によるこうした媒介作用から切り離されて明示的意味と暗示的意味が把捉される場合、とくに十分に技術が確立しこの区別がかなり明らかであるかに見える場合^{*2}、人工物の第一次的機能の歴史的生成が技術の内的な論理によるものであるかのような理解がなされる余地が生じてしまう。設計者は丸テーブルをデザインするとき、平等に卓を囲みうるようなものとしてテーブルをデザインするのであって、テーブルの抽象的「機能」から見てこうした人間関係がいかに付随的に見えようと、そのかぎりでのこうした人間関係はテーブルの「一次的」機能に属する。同じように、自動車の輸送・移動機能は人口密度の低い郊外の都市デザインが自動車の機能に組み込まれ、一つのコードとして固定化してきたものであって、歴史的な存在として自動車を見たとき、明示的-暗示的の区別は絶対化されえない。

こうしてみると、明示的-暗示的という区別は、人工物の意味の区分として必ずしも適

*1 Peter Paul Verbeek, *What Things Do*, translated by Robert P. Crease, Pennsylvania: Pennsylvania State UP., 2005.

*2 A・フィーンバーク『技術への問い』直江清隆訳、岩波書店、2004年。

切なものとは言えないように思われる。むしろ、ここから見えてくるのは、人工物を媒介項として形成される人々の関係、つまり設計者と使用者はもとより、人工物を使いながら生を営む人々の関係である。‘一次的’な明示的機能と‘二次的’な暗示的機能の区別はこの関係に照らして、そのつど検討されなければならぬ。このように、技術的な人工物は人間と人間の間であって世界との関わり方を形成しており、世界との媒介関係の中でその機能や意味をえているのである。技術的機能が重層性をもつなかで、媒介関係のうちでこうした機能をより適切に位置づけることが求められているのである。

3. 設計者の意図を超えて

前節の途中で、ねじ回しがねじ回しであるのはそう設計されているかどうか、つまり設計者や設計者たちの集団がもつ志向性(intentionality)に基づいてであるかどうかによってという議論を紹介した。仮に婚ことを受け入れるとしても、技術的媒介にとっては人工物が設計者の意図を「越える」という事態がよく知られている。しばしばいわれるのは、技術による人間—人工物—世界という媒介が一律性や一義性をもった過程ではなく、設計者が当初設計したのとは異なる解釈を人工物がされ、そうしたものとして進んでいってしまったり、技術がしばしば当初の設計・制作の際の意図にはなかった効果をもたらしてしまったりするということである。

よく知られた例でいうならば、エジソンの手でメモ代わりの記憶装置として発明された錫箔を巻いた円筒の式蓄音機は実業的には大失敗であった。ビクター社によって音楽の再生装置という意味を発見されると蓄音機は音響機器として解釈されるようになり、以後この方向で発展のちのレコードへと繋がっていく。同じように、ディーゼルは今日でもエンジンの発明者として名を残しているが、彼が開発したエンジン^{*1}は、多くの工場から試作品の段階で返品にあって、彼もやはり破産に追いやられている。いわゆるディーゼルエンジンはその後の多くの技術者の改良によるものであり、彼の名を冠するかどうかについては争いが生じた例が有名である。最近では、ヨーロッパで寒気を遮断するために設計された自動回転ドアが、日本に入ると高層ビルの風を防ぐという方向で進化して、重量が次第に重くなり、結果として幼児や車いすの人々をも排除し、凶器となってしまったような例がある。

これらの例では、先の明示的機能と暗示的機能のいずれが基礎的かといった議論がより明確に現れている。すなわち、差しあたりエジソンの例では暗示的な意味に近い機能が、ディーゼルの例では明示的な意味が問題となっているかに見えるかもしれない。しかし、しかしエジソンの例でも音楽メディアという方向が蓄音機にとっての核心であり、この点でディーゼルの例ではそのような方向がはじめからやや明確であったにすぎない。逆に、蓄音機や回転ドアの例では、設計者が抱くこうした「一のため」の機能かというかたを人工物が超えて変化していったが顕著であるが、設計の詳細段階で見ればディーゼルについても多かれ少なかれ同様のことは見いだせよう。一般的に言って、技術が社会や文化の中で設計者・技術者やユーザーによって何として理解され、解釈されるかが、その技術が何

*1 D・ノーマン『パソコンを隠せ、アナログ発想でいこう』岡本明他訳、新陽社、2000年。

であるかに関わっているのであり、その後の技術の発展の方向を規定しているのである。技術的な人工物には、芸術作品などと同様に、この解釈という大きな恣意性が組み入れられていると考えられる。

さて、この点はさておくとして、技術が設計者を超えていくという事態の説明モデルとして出されるのが「進化論モデル」である。上述のような、何が本来の機能で何がそうでないかの区別が固定的なものでない点に関しては、肺や鳥の羽などがそうであるように、かつて有していたのとは異なる生物学的機能を進化の途上で獲得し、^{*1}現在はその新たな機能ゆえに適応的になっている「外適応」と呼ばれる現象が援用される。

むろん人工物の場合には、たんなる適応ではなく、人工物の志向性が機能の意味変化の前提となる。適応という外的視点をとるのでなく、設計者・技術者やユーザーによる理解や解釈に依拠する議論も可能であろう。「文芸作品モデル」がそれである。例えば、アイディは、技術的人工物と芸術作品の類似性に着目して、技術が構造的にも歴史的にも設計された機能には還元できないことを、文学における「意図の誤謬」に準えて「設計者の誤謬」と呼んでいる。「文学作品の意味が作者の意図によってあとづけられたり、限定されたりできないとすれば、それと同様に、技術の使用や機能、影響は設計意図に還元しえないし、また現にしばしば還元されないのである」^{*2}。(設計者の意図という際、直接体験される欲求やニーズではなく、人工物において実現されるべき「要求」や「機能」が指されることも多いが、ここもそう理解することもできよう。)実際、「意図の誤謬」は作者と作品の間でのずれに多くを依るものであるし、この点では設計・制作者と人工物との関係と並行的であるかに見える。

しかし、これは議論の出発点に立ったにすぎない。人によってはここで、「作者の死」を唱えて、作者をテキストの外部へと追いやったバルト以来のフランスのテキスト論、脱テキスト論の一連の議論を思い起こすかもしれない。あるいはまた、受容者の側の読みの創造性に着目したイーザーらの受容美学を参照する向きもあるかもしれない^{*3}。筆者としても、創造者-作品-受容者の美学的関係に着目して美学モデルを取り入れることに大きな異存はない。ただしそれは、作品形象の読みに過大なウェイトを置くことなく、意味形象の自立性とその限界設定と技術的事象に則して行うというかぎりにおいてである。それというのも「文芸作品モデル」には技術的媒体に対する解釈としては問題を孕んでいるからである。文芸作品の完結性、無関心性が、「テクネーはポリティアになった」というL.

*1 Beth Preston, Why is a wing like a Spoon? A Pluralist Theory of Function, *The Journal of Philosophy*, Vol. 45-5, 1998. 技術哲学の現状からして、「機能」の概念にかぎらず、いくつかの重要な議論は生物学の哲学での議論を参照する必要がある。

*2 Ihde, 2002, p. 106.

*3 例えば、齋藤直樹「構成主義的技術論における「受容」概念に関して --技術論と美学の対話の可能性を求めて」『モラリア』14号、2007年。

ウィナーの主張の象徴されるように、^{*1}技術的な媒介が狭義の技術的領域をこえて他の社会的、倫理的な領域や生活世界と徹底して絡み合っておりその公共的な性格への目配りが欠かせないことは取りあえずさておいておこう。それはいずれにせよ扱わなければならない問題であり、設計者・制作者-人工物-使用者の関係はそもそもかなり違ったものとならなければならないことは当然だからである。より大きな問題は、本論で見えてきたように、技術的人工物の機能は物理的事象によって裏打ちされており、それゆえ意味として把握される場合にも、芸術作品や貨幣ほど物理的性質からの恣意性をもたない。こうした「二面性」は物理的因果性がより直接的に影響をもつ医薬品の副作用から、より複雑に媒介され“文化的”に規定された機能にまでおよび、また様々なレベルでの副作用・副次作用に関心が払われる基礎ともなる。こうした物理的関係を読み込むためには、「文芸作品モデル」にはかなり大きな組み直しが必要になるものと思われる。

技術についての哲学的考察は、技術がこの現実を媒介・統合するあり方に立ち入らなければならないことを冒頭で述べた。昨今の内外の研究動向は、技術科学の科学哲学、設計の哲学／価値論、人工物の志向性などの存在論といった個別化の傾向を強めているかに思われる。それは旧来の技術哲学が、ともすれば技術とはというやや大状況的な問題に取り組んできたことへの反省でもあり、個別の議論の整備は立ち遅れたこの分野にとって喫緊の課題ではある。しかし、例えば脳神経科学の発達で身体 — 人工物の関係が大きく変容しようとしている現実その他を見るにつけ、人工物の倫理性への問いやそれをも含んだ技術的媒介と言った個別の問題を束ねる大きな問題が必要であることも、またたしかであるように思われる。本論はこの線にそって、問題の配置状況を概観し、取りあえずの研究のアウトラインを描いたものである。

*1 L・ウィナー『鯨と原子炉』吉岡斉、若松征男訳、紀伊國屋書店、2000年。

(本稿の第2節は、旧稿「機能と意図の問題圏に寄せて --人工物の哲学への序曲」『モラリア』13号、2006年に負うところが大きい)